

健康文化

花

玉木 正男

花が一年を通じて特ににぎやかな季節となった。日本の花は実にすばらしい。華道のことはいうまでもないが、「野の白百合」、「路傍の花」を想う旧制八高の寮歌は青年時代から筆者の愛唱する歌である。今春学会の時泊まった横浜のホテルの部屋で、毎日活けかえられた一輪の花を見ての感慨は年のせいであろうか。横浜の波止場から船に乗って異国の放射線医学視察の長旅に出かけてから40年に近いが、花に関連して主に欧米で見、聞き、感じたことどもを書き記すスペースをいただいた。

花の色

「ああ五月（サツキ）、フランスの野は火の色す、君もコクリコ、われもコクリコ」、与謝野晶子の1912年の歌である。1989年の七月、国際放射線医学会の直後、筆者はパリからローマまで列車で旅行したが、南フランス、北イタリアの野は車窓から見ると一面に、コクリコ（ヒナゲシ）の「火の色」ではなく黄色の花畑。同じ年の同じころ岡本太郎画伯も北イタリアの旅をしたという。「ぱーっと広がる圧倒的なひまわり畑に……全身目となってしまふ」と画家らしい表現がみられる。イタリアでは *girasole*（「回る太陽」の意）とよび食用油の原料だと乗り合わせたイタリア人が教えてくれた。

花の名

ナノハナ——日本の春の野を黄色に埋めつくした菜の花（アブラナ）が近年油を他に求めるため激減したのはさびしい。約30年前のこと、長崎県佐世保に米国から転任した直後の軍人の夫人が、乳癌手術後の放射線治療を求めて来訪した。西日本の野にみちみちたあの美しい黄色の花は何かと質問され、和英辞典でしらべて“**R-A-P-E, rape, rape**”と大声で答えてから、はっと気づいたのは同じつづりの別の単語（語源は別）があること、レディに対して大声で言うのはどうか、話題を急いで変えたのであった。このことのおかげで、最近の米国のニュース「**rape** に対するフランス政府の助成金……」という英文もす

ぐ理解できた。E C諸国のアブラナやヒマワリの耕作に対する政府助成金は、米国の大豆油輸出を妨げ不当だとの主張は、日本政府の米作に対する助成金と同様のケースらしい。

パンジイ (pansy) —— 「三色スミレ」であるが、花びらの三色の配列が人の顔に似たものがあり、この花を見ると人を「想う」といわれる。pansy という英語は、フランス語の pensee (パンセー、想い) の第一音節 pen はフランス語風に、第二音節 see は英語風に発音するように強引に作られた珍しい英語である。

グラジオラス (gladiolus, 略称 glad) —— うれしい (glad な) 結婚式に glad の花がいつも用いられているのは理解できるが、米国の病院で X線診断カンファレンスに参加して、側方向、斜方向の胸部 X線写真が出る場合に gladiolus という言葉が時々聞えるのは初め全く理解できなかった。胸骨の中央のいわゆる体部を gladiolus ともいうことは、日本で昔から普及したドイツ医学系の教科書、医語辞典には多分出ていないが、コンサイス英和辞典には見られる。十数個の肋軟骨を左右のふちにつける胸骨体部の形が、十数個の花をつけるグラジオラスの花茎に似ているための用語である。

Climbing rose, Bleeding heart —— Charles Dotter 教授が放射線科を主宰していた米国オレゴン州立大学病院のある Portland 市には永く滞在した。Rose City という名もあり、世界各国から多種類のバラを集めた公園が美しい。電柱などから高く昇る始めて見た一種のバラは、climbing rose (つるばら) という分類名をもっている。また世界中からあらゆる種類のライラック (リラ) の木を集めたという公園もあるが、今年も香ぐわしい薄紫のリラの花の咲く頃であろう。心臓の X線診断学を教えられた Dotter に、bleeding heart (出血する心臓) という名のハート形の赤い花 (コマクサの一種) のあることを、ロッキーの峰をあえぎながら登っている時に教わったことも思い出される。

窓辺の花

オランダは日本同様国土はせまく天然資源にとぼしく、全力をあげてすぐれた物を輸出している国である。その一つ、医療用放射線機器のメーカーを視察した時の話である。昼になると、大食堂でその日の外国人来客をそれぞれその国の国旗とオランダ名産チューリップの花とを飾った食卓につかせるのも心にくい。食事中に医療機器輸出に熱心なことをほめると、オランダはチューリップなどの花を貨物ジェット機に満載して遠くはカリフォルニアまでも送っていると聞かされ、有名なオランダの花作りが有力な輸出産業にもなっているのに

感心した。一見をすすめられた花のせり市 (auction) を見に行ったが、広大な花畑に近い競売場内にはいくつかの auction hall がある。患者を前にして臨床講義をする医科大学の階段講堂によく似たホールだが、講壇に相当する所にあるU字形のレールにのって、見本の花を積んだ車が次々現れる。買い手は各自の座席からプッシュボタンで、希望する品と単価と量を送信する。競売場内には銀行があり、即日決済。文字どおり「レールにのった」能率的なオランダの花売りである。都会には花売り娘も見かけぬわけではないが。花の輸出先としてトップは西ドイツと聞き知った。

そういえばドイツの町を歩くと、街路に花壇が多だけでなく、統制好きの国民性によるかもしれぬが住宅に窓辺の花が一つづきに飾られている美しい風景を見かけることが、他の先進国にくらべて多いように思う。日本でも公園や街路には多くの花を見るようになったが、わが国の住宅、特に近年多い高層マンションの異様な「干し物風景」(太陽熱の活用、エネルギー資源の節約ではあるが)を少しずつでも窓辺の花におきかえて、美しい花にもめぐまれたゆたかなわが国の文化振興を考えられないものであろうか。

十二月の美しい花

花の温室栽培などのなかった昔の話である。バラを国花とする英国の昔の作家 Sir James Barrie (「ピーター パン」の作者) が、スコットランドの名門校 St. Andrews 大学の卒業式で述べた式辞が伝わっている。『人は神から memory (思い出) という能力を与えられたので、十二月になってもバラの花を見ることが出来る。それは六月のバラよりも少ないけれどもずっと美しい! 人生の十二月、老い、つかれ、しかも孤独になった時に美しい思い出をもつ唯一の方法: それを若い時からため込むことである。』卒業できてうかれている若者の中に、この式辞の思い出を書き残したものがいたのであろう。世界の趨勢を論じヒューマニズムを説く大学の式辞は聞きなれたが、Barrie のこの式辞は大学を卒業して行く若い人たちに対する素晴らしいはなむけといえよう。

十二月になっても美しい花をいろいろ見たいものである。

(1993年4月記)

(大阪市立大学名誉教授)